

## Good News and Bad News in 2014

フォトニクス研究所長 佐々木慎也

日本の科学技術分野において、2014年は忘れられない年になりそうである。印象的な Good News と Bad News があったからである。

まず、Bad News から振り返ってみると、これは STAP 細胞にまつわる事件である。理研の最終報告書を読むと、いかにもさんな研究であったのかがよくわかる。特に存在しないデータを用いて論文を書いているところなど、信じられない話である。O 氏の博士論文のコピー&ペースト疑惑（博士論文の 26 ページにわたるイントロダクションのうち 20 ページがコピーされたもの）に対する世間の反応も種々様々であり、考えさせられた。特に、「論文のイントロダクションなど、誰が書いても同じになるから、コピー&ペーストなんて大した問題ではない」なる趣旨の発言が現れてくる至っては、驚くべき事である。そもそも論文のイントロダクションは、自分の論文の立ち位置（オリジナリティ）をアピールする場所であり、結論とともに論文のなかでも最も重要な箇所である。これらの Bad News を他山の石として、研究倫理の再確認が必要であることを痛感した次第である。

さて、Good News に移ると、これは何といても、日本人 3 名が「明るく省エネルギーの白色光を可能にした、青色発光ダイオードの発明」によりノーベル物理学賞を受賞したことである。従来のノーベル物理学賞は、どちらかという基礎物理に関する発見や研究、ならびに測定技術の開発に対して贈られており、発明に対して贈られた例は大変少なく、私の知る限り、位相差顕微鏡、泡箱、CCD と今回の青色発光ダイオードぐらいである。今回の発明は、アルフレッド・ノーベルの遺言である「人類のために最大たる貢献をした人々」に贈られるノーベル賞に最もふさわしい発明である。発光ダイオードの発明者であるニック・ホロニアックが受賞しなかった事や中村氏の受賞に疑問を呈する人もいたが、日本人 3 名が受賞したことは、同じ日本人として大変嬉しい Good News であった。今後のノーベル物理学賞も、人類の永続的存在を可能にする発明に対しても贈られることを期待すると共に、そのような研究が増えることを希望する。